

水の 話

FUJI CLEAN NEWS

2019
Hello New Year!!

NO. 182

[特集]

水で未来を拓く
新たな地方創生。

福井県大野市の東ティモールへの水支援プロジェクト

水で未来を拓く 新たな地方創生。

福井県大野市の東ティモールへの水支援プロジェクト

福井県の約20%の面積を有しながら、そのほとんどが山林で形成される大野市。

昔から「名水のまち」としても知られ、豊富な湧水が人々の暮らしや文化を育ててきました。

近年は、地下水保全の取り組みに加え、水への感謝の気持ちを世界へと発信する、

新たな地方創生のプロジェクトをスタートさせ、多方面から注目を集めています。

市民が一体となって水の恵みをブランディングする、小さなまちの大きな挑戦を紹介します。

DATA

2018年4月1日現在

大野市(人口33,735人 面積872.43平方キロメートル)
福井県の東部に位置する大野市は、県の約5分の1という県内の市町の中で最も広大な面積を保有。市内を流れる4つの河川は九頭竜川へと合流し、市街地のある大野盆地からは雄大な山並みを望むことができます。近年は、雲海の中に浮かび上がる越前大野城の幻想的な絶景が人気を集めています。



福井県
大野市

大野市の中心部にある亀山に築かれた越前大野城。現在の天守閣は、1968(昭和43)年に復元されたもの。

水とともに生きる「結の心」のまちづくり。

水と共生する湧水文化が根づくまち

霊峰白山の支脈に囲まれ、全体の87%が森林という豊かな自然に恵まれた大野市。白山山系を源流とする九頭竜川とその支流である真名川、清滝川、赤根川の4つの一級河川がそれぞれ北に向かって流れています。日本百名山の一つである「荒島岳」などの雄大な自然に囲まれており、冬に積もった雪や降り注いだ雨が浸透し、地下に溜まることで湧水となってたっぷりの恵みをこの地にもたらしています。

大野市街地は、今から約440年前、織田信長に仕える金森長近によって大野城の築城と合わせてつくられた城下町です。長近は、信長から受け継いだまちづくりの方法で城下町を整備し、道路の中央には生活用水路、各屋敷の境には生活排水路を張り巡らせていました。古くから湧き水が豊富だった大野市では、湧水地のことを親しみを込めて「清水」と呼び、名水百選にも選ばれた「御清水」や平成の名水百選に選ばれた「本願清水」など多くの湧水地が点在しているため、「名水のまち」として知られるようになりました。市民と水との関わりは深く、豊富な地下水は日常生活や産業に活用されるなど、この地域の人々の暮らしとコミュニティに根ざした、独自の湧水文化が育っていきました。

大野市には昔から、お互いに助け合う習慣や、さまざまな地域との絆を大切に育んできた文化があります。現在は、これを「結」の言葉に込めて、「結の故郷 越前おの」をキャッチコピーに、人、時、地域とのつながりを大切にしたいまちづくりに取り組んでいます。

「当たり前」から「ありがたい」へ。市民意識の変化

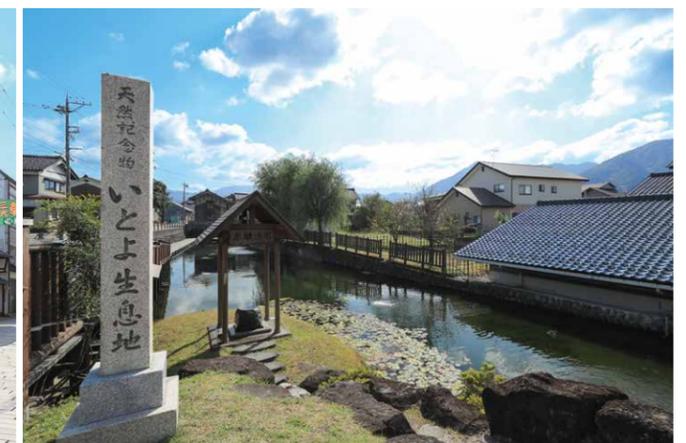
現在も、市民の約7割は炊事や洗濯、風呂などに地下水を利用している大野市ですが、歴史を振り返ると大きな水環境の危機を経験しています。昭和40年代後半になると、それまで「当たり前」にあった地下水の水位が次第に低下し、多くの家庭で井戸枯れが発生し始めました。御清水などの湧水も干上がり、貴重な淡水魚のイトヨも全滅の危機に瀕していました。繊維業が盛んだったため、井戸水の汲みすぎや、高度経済成長に伴う生活環境の変化による水の無駄遣い、また豪雪地帯のため、融雪のための多量使用などが原因と考えられています。

こうした危機に対して大野市では、1977(昭和52)年に「大野市地下水保全条例」を制定し、翌年には「水田湛水事業」を全国に先駆けて開始しました。市民参画による地下水の保全活動が活発になり、1985(昭和60)年頃からは御清水、本願清水、中野清水に市民が会を結成し、継続的な観察や清掃活動が浸透していきました。本願清水では、20年以上にわたって小学生と大人と一緒に清掃活動を行っています。地下水位が戻った現在も、毎日欠かさず市民が地下水位を計測し、市内の所々に掲示されています。

長年にわたる行政と市民の地下水保全活動は、2013(平成25)年に日本水大賞「環境大臣賞」を受賞、そして何よりも、こうした危機を経験したことが、無限にあると思ってきた大野市民たちの水への意識を「当たり前」から「ありがたい」へと変えるきっかけとなり、市民の中に「水への感謝の想い」が改めて醸成されていきました。



今でも城下町の風情を色濃く残しているまち並みは、「北陸の小京都」と呼ばれています



全国でも数カ所しかない淡水型イトヨの生息地である本願清水は、国の天然記念物に指定されています

【取材協力・写真提供・資料提供】 ○ 大野市 湧水再生対策室

【参考資料】 ○ おいしい水は宝もの 大野の水を考える会の活動記録(大野の水を考える会 著/築地書館株式会社 発行)

水に感謝し、水の恵みを世界とシェアする Carrying Water Project

「水」というアイデンティティの再構築で 地域活性化

湧水の枯渇危機、そして湧水・地下水を取り戻すための多くの活動を経たことによって、大野市にとって「水」は大切な「財産」であるとともに「アイデンティティ」であることが認識されました。そんな中、次に浮かび上がってきたのが人口減少の問題です。大学や専門学校のない大野市では、高校を卒業すると多くの若者が市を出ていくため、いかに人口減少に歯止めをかけるかが討議されていました。地方創生は、短期的ではなく中長期的につなげていくことが重要であり、そのためにはこの地に元々あるもの、市民みんなが誇れるものでなければならぬと考え、2015(平成27)年にスタートしたのが、水への感謝の気持ちを「水への恩返し」として発信する新たな取り組み「Carrying Water Project(以下CWP)」です。これは、水を通してまちの魅力を国内外に発信し、改めて市民や関係者に「水への誇りと自信」を持ってもらうことで、まちの活性化につなげていこうという活動です。「名水のまち」と呼ばれる場所は日本各地に存在していますが、その中でも大野市は、このまちでしかできない水を通じたソーシャルな人口減少対策という新たな試みを始めたのです。

水に恵まれない国に、 安全で安心して飲める水環境を

CWPの中核的な活動となっているのが、東南アジアの東ティモール民主共和国への支援活動です。2016(平成28)

年に公益財団法人日本ユニセフ協会とパートナーシップを結び、自治体では初となる「地域と用途を明確にした指定募金制度」を利用して、2017(平成29)年より東ティモールで、ユニセフが実施する水と衛生プロジェクトを支援し、3年間で東ティモールに計6基の重力式給水システム*(以下GFS)を設置する計画を進めています。

東ティモールは、長い紛争を経て2002(平成14)年に独立したばかりの未だインフラが十分に整備されていない、アジアで最も水環境が厳しいと言われている国です。3~4キロメートル離れた水源へ毎日水を汲みにいくのは女性や子供の仕事です。GFSを設置することで、簡単に安全な水にアクセスできるだけでなく、水汲みの重労働から解放できる環境を実現していきます。視察から始まり、現地の人々との交流を図りながら、2017年の夏にエルメラ県のウラホー村に1基、アイナロ県ムロ村に1基のGFSが完成、2018(平成30)年10月の時点で計4基の給水施設の設置が完了しています。すでに水が引かれた地域では「子供が水汲みの仕事から解放されて学校に通えるようになった」「自分の村で安心して出産ができるようになった」など、喜びの声が上がっています。また学校に通える子供が増えたことで、校舎が増築されたり、水洗トイレの整備も進んでいます。2019(平成31)年までに計画されている6基すべてが設置されると、3,300人以上の子供と周辺地域の人々が、安全で持続可能な水へアクセスできるようになる予定です。

*重力式給水システム…標高の高い湧き水や泉などの水源から標高の低いコミュニティまでパイプをつなぎ、重力を利用して水を供給する仕組み



完成した重力式給水システムと村の人々



村に整備された水場によって、いつでも安全な水が使えるようになりました



村に水が引かれたことで、小学校に水洗トイレと手洗い場が整備されました

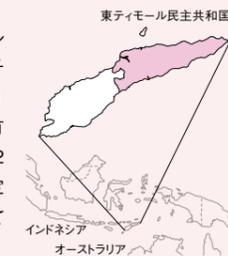
水の恵みを世界とシェアし、誇りと自信を育てる

さらに東ティモールへの支援は給水施設だけでなく、水環境を担う人材の育成をめざして、東ティモールの学生5名と引率者1名を大野市に招聘しました。これは2018(平成30)年3月に科学技術振興機構が実施した事業を活用したもので、6日間にわたって水への取り組みや水循環を学び、水環境を守っていくための意識を向上させる大切な機会となりました。こうした活動も、東ティモールへの永続的な支援につながると考えています。

東ティモールへの支援活動は、2年が経過した現在、すべて市民や支援企業による募金や寄付で実現しています。行政だけでなく、市民・企業が連携して活動を実現するために結成した「水への恩返し財団」は、商工会議所、農協、森林組合、建設業界、金融業界、学識経験者など市内の多くの団体で構成され、みんなでこの活動を盛り上げていくことをめざしています。また越前大野名水マラソンなどのイベントでは積極的に募金を集め、市内220カ所の事業所などに募金箱を設置しています。自らが行った寄付によって困難を抱える地域と水の恵みを分け合い、社会・世界貢献に取り組むことが、大野市民一人ひとりが自分たちの恵まれた環境に誇りと自信を持つことにつながると考えています。

東ティモール民主共和国

インドネシア東部に位置するティモール島の東半分に位置する島国。東京・千葉・埼玉・神奈川を合わせた程の約1万4,900平方キロメートルの面積を有し、約121万人が暮らしています。2002(平成14)年に独立し、治安が不安定ながら、政府による国づくりが進められています。



遠く離れた場所に水を汲みに集まる東ティモールの女性や子供たち



越前大野名水マラソンでは、1人のランナーが1キロメートル走るごとに10円が世界の水環境改善のために寄付されています



材料調達、調理、おもてなしまで、すべてにこだわった「一夜限りのレストラン」



拾ったどんぐりを半年間かけて大切に苗に育てた後、植樹を行います



「水のがっこう」で使用する「水の本」は、大野市の湧水再生対策室が制作。日本ユニセフ協会を通じて、全国の小・中・高校および特別支援学校へ約4万部が配布されました。



周囲の樹木や山々の姿を水面に映す神秘的な刈込池。大野市の豊かな自然環境を感じることができます



写真提供:大野市産経建設部商工観光振興課

冬のはじまりを告げる人気者、こたつで食べたい、でっち羊かん。

ひんやり冷たく、柔らかい食感の水ようかん。大野の冬の水ようかんは、別名「でっち羊かん」と呼ばれ、大正・昭和の時代から、冬の銘菓として親しまれています。でっち羊かんの呼称については、「奉公に来ている丁稚が里帰りする時に持たせたから」などの謂われがあります。さっぱりとした甘さのでっち羊かんは、糖度が低く日持ちしにくいので、冷蔵庫がない時代は夏場の保存が難しかったことから、冬に食べられるようになりました。お店によって味も食感もさまざまなので、「でっち羊かん通」の人々は毎年、こたつに入って食べ比べを楽しむそうです。



平成大野屋 結楽座 福井県大野市明倫町3-28

Tel 0779-69-9200
営業時間 9:00~18:00
定休日 年末年始(12月29日~1月2日)
Web www.h-onoya.co.jp

越前おおの結ステーションの観光拠点施設「結楽座」では、大野市の観光土産や特産品、地元の農産物、手作り雑貨、民芸品、大野伝承食文化の「醗酵食品」などが販売されています。でっち羊かんは、冬季限定(10月末頃から2月末頃)の販売なので、ご購入の際はホームページやお電話でご確認ください。

小さなまちから世界へ届ける「水への恩返し」の想い。

市民とともに、大野市の新しい魅力を創造

CWPでは、東ティモールへの支援以外にも、これまで大野市で蓄積された水に関する知見をシェアし、子供たちが世界の水について学び、考える機会を提供する「水のがっこう」をはじめ、水の素晴らしさを“食”を媒介してブランド化していく「水をたべるレストラン」、大切な水環境や湧水文化を守っていくための「水環境の保全や継承」など、その活動は多岐にわたっています。

市民を巻き込んだ活動も活発化しており、2017(平成29)年8月1日の水の日には、大野市に住むさまざまな分野のエキスパートが結成した、通称「ミズカラ」というグループが一から企画を行い「一夜限りのレストラン」を開催しました。古民家を借りて食や水に関する有識者を招き、大野市の酒蔵でつくった日本酒、湧水で炊いたご飯のおにぎり、東ティモールのコーヒーなど、大野市の水で育まれた食材で作った料理を振る舞い、食を介した温かなおもてなしは、多くの人に喜ばれました。また「どんぐりの森づくり」事業では、市内の小学校2年生の子供たちが半年間、種から育てた苗木を植樹したり、冬季の水不足を解消するために空いている水田で湛水を行うなど、市民と一緒に「水への恩返し」の気持ちを上げています。

水を通じて地域の魅力を高め、未来を拓く

こうした大野市の活動を広くアナウンスするために、市外、県外、世界に向けた「意識啓発、賛同の輪の拡大」も積極的に行っています。2017年からは、水の日に合わせてCWPによる意見広告を日本経済新聞に掲載。大きな話題となり、第66回日経広告賞環境部門最優秀賞・環境大臣賞を受賞しました。さらに大野市の活動は、国内外の学会やシンポジウムでも積極的に紹介され、2018(平成30)年3月にはブラジルのブラジリアで開催された「第8回世界水フォーラム」に参加しました。日本の市区町村レベルの自治体では唯一の参加であり、各国の水関係者が一堂に会する世界最大級の国際会議において、展示ブースを出展しプレゼンテーションも行いました。

小さなまちの取り組みは、少しずつ、確実に、市民の気持ちと行動を変えただけでなく、世界へと広がり、市の存在価値を高めてきました。今後は、この成果を市民に還元し、市民がこのまちに誇りと自信を持って自走していける元気なまちになっていくための次の挑戦が始まろうとしています。当たり前にあった地域資源を、「誇り」に変えるという新しい地方創生の取り組みは、すべての人の守るべき故郷を見直すきっかけになるかもしれません。



2017年8月1日 日本経済新聞の一面に掲載され、環境大臣賞を受賞した大野市の意見広告

NEWS

2020年新卒向けインターンシップを開催しました。

フジクリーンでは、2018年9月から12月にかけて、2020年新卒向けインターンシップを開催しました。

インターンシップでは、開発、営業、企画の各業務の体験を通して、浄化槽について知っていただき、浄化槽メーカーの仕事への理解を深めてもらいました。日頃、浄化槽の姿を目にすることがほとんどない参加者は、実物大の浄化槽のサイズに驚きながらも、微生物の働きを活用した処理方法の説明に大変興味を示されました。参加した学生の方々からは「インターンシップを通して将来につながる貴重な体験ができた」と感想をいただきました。



次回のインターンシップ(開発業務)開催は、2019年2月22日(予定)です。

EVENT

第40回浄化槽行政担当者研究会で『非常用マンホールトイレ』についての発表を行いました。

第32回全国浄化槽技術研究集会(公益財団法人日本環境整備教育センター主催)の併催行事として、第40回浄化槽行政担当者研究会が2018年10月10日愛知県名古屋市中で開催されました。浄化槽行政担当者研究会は、各都道府県・政令指定都市および市町村の担当者が一堂に会して、浄化槽に関連する諸課題についてのさまざまな研究を協議することにより、生活排水処理対策の向上と浄化槽行政の円滑かつ適正な指導を図ることを目的としています。

フジクリーンからは、「非常用マンホールトイレの浄化槽への展開について」を発表いたしました。東日本大震災や熊本地震でのトイレや下水インフラの状況を踏まえ、非常用のマンホールトイレのご紹介とともに、今後の災害対策へのご提案を行いました。

マンホールトイレとは:下水道管路や浄化槽のマンホールの上に簡易トイレを直結させる災害用トイレのこと



発表資料の一部抜粋

マンホールトイレ外観

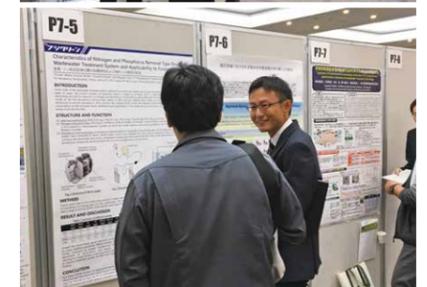
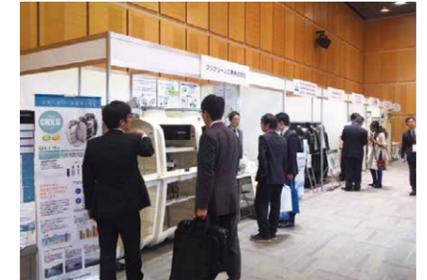
EVENT

湖沼の環境問題を考える 第17回世界湖沼会議が開催されました。

2018年10月15日から19日、茨城県つくば市をメイン会場として第17回世界湖沼会議(いばらき霞ヶ浦2018)が開催されました。世界湖沼会議は、1984年に滋賀県の提唱により開かれた「世界湖沼環境会議」の後身として、世界各地で開催されてきました。以来、同会議は研究者・行政・NGOや市民等が一堂に会し、世界の湖沼およびその流域で起こっている多種多様な環境問題やそれらの解決に向けた取り組みについての議論や意見を交わす場となっています。

茨城県で世界湖沼会議が開催されるのは、1995年に第6回会議を開催して以来、23年ぶり2回目。湖沼の環境問題を解決するためには、行政や研究機関だけでなく、一般の方々の協力も欠かせません。この会議をきっかけに、湖沼の環境保全について、さまざまな方に、より関心をもっていただける機会となりました。

本会議に併催された企業展示ブースと、世界各国や企業のポスター展示研究発表にフジクリーンも出展し、多くの方に浄化槽について紹介することができました。



平成30年度浄化槽製造工場見学会がフジクリーンの3工場でも開催されました。

未だ1,200万人が汚水処理施設を利用できていない現状を受け、現在、国土交通省、農林水産省、環境省の3省では、各都道府県に向けて生活排水処理施設の早期(10年)概成を求めています。そこで一般社団法人浄化槽システム協会では、市町村で浄化槽を担当されている方々に向けて、今年度も2018年10月から2019年2月に、全国の9工場にて、浄化槽製造工場見学会を開催しています。フジクリーンの3工場においても10月から11月にかけて開催され、那須工場9名、三好工場15名、飯塚工場13名の方にご参加いただきました。見学会では浄化槽の構造や機能をはじめ、施工や維持管理についての説明を行い、通常であれば入ることのできない製造現場の生産ラインを案内しました。見学後には、参加者から、浄化槽のメンテナンスに関する具体的な質問や、ベットの排泄物処理についての質問、また環境配慮型浄化槽に関する意見交換などがありました。



EVENT

世界最大級の水のイベント 2018年 第11回国際水協会 (IWA) 世界会議・展示会に参加しました。

2018年9月16日から21日東京ビッグサイトで、2018年 第11回国際水協会 (IWA) 世界会議・展示会 (IWA World Water Congress & Exhibition 2018) が開催されました。この会議・展示会は隔年で開催され、100を超える国々から約6,000人以上の参加者、200以上の企業や団体が参加する、水に関する世界最大級のイベントです。世界中から、上下水道、水環境分野に関する研究者・事業者・企業等、水の専門家が一堂に集まり、新たな知見や技術を共有する場となっており、日本初開催となった今回は、約10,000人が参加しました。

フジクリーンは、日本の水関係企業が集まったジャパン・パビリオン会場にて、一般社団法人浄化槽システム協会の出展に協力させていただきました。ブースを訪れた世界各国の水処理関係者に対し、浄化槽の優位性とこれまで培ってきた技術力とノウハウをPRすることができました。



組織体制
の変更

札幌支店、東北支店が移転しました。

2018年12月より、札幌支店、東北支店の2支店が事務所を移転しました。新事務所は下記となります。

札幌支店 新事務所開所日 2018年12月17日

〒060-0807
北海道札幌市北区北7条西
1丁目1番地2 SE札幌ビル 10階
TEL.011-738-5075 FAX.011-758-5505

東北支店 新事務所開所日 2018年12月10日

〒980-0803
宮城県仙台市青葉区国分町1丁目6番9号
マニユライフプレイス仙台 2階
TEL/FAXとも変更ありません。

会員
サービス

フジクリーン維持管理ネットワーク 新規会員募集中 [参加無料]

フジクリーンでは、製品の品質向上とより良いサービスの実現を目指して、維持管理会社様との情報伝達を密にする維持管理ネットワークを拡充しています。ご登録いただくと、維持管理に役立つ情報や新製品の詳細情報を配信いたします。また、講習会や情報交換会の開催もご案内いたします。詳しくは、お近くの営業担当にお問い合わせいただくか、弊社ホームページよりご登録ください。

<https://www.fujiclean.co.jp/fujiclean/ijikanri.php>

1 維持管理や新製品など、役立つ情報を定期的に配信！

近年の浄化槽は機種によって、構造や維持管理方法に違いがあります。機種に応じた適切な維持管理方法や浄化槽・プロワの普段の維持管理の現場で役立つ情報をお届けします。

2 維持管理上のご相談を承ります

維持管理上のお悩みがありましたら、お気軽に最寄りの弊社営業担当者にご相談ください。早期解決によりお施主様とのトラブルが未然に防げます。

3 定期的に講習会なども開催します

近隣地域で開催する講習会をご案内いたします。講習会・情報交換会・工場見学などにも随時対応いたします。



現場講習会の様子

ぜひご登録ください

必要書類の更新情報をメールでお知らせ！ 『最新版お知らせサービス』

フジクリーンのウェブサイトでは、浄化槽の計画から施工・維持管理までの工程に必要な書類が「ダウンロードコンテンツ」ページより手軽にダウンロードできます。さらにダウンロードする際に、画面最下部にある登録フォームからメールアドレスをご登録いただければ、ダウンロードした書類と関連のある書類が追加・更新されると、その情報を随時メールでお知らせしています。また登録時に受け取る情報の選択もできるため、必要な情報だけをお知らせします。

メールアドレスをご登録いただく最新版のお知らせがきます。
(登録されなくてもダウンロードはできます)

メールアドレス (※角高数字)
download@fujiclean.co.jp

メールアドレス (確認用)
download@fujiclean.co.jp

受け取る情報 (※角高数字)
 申請情報 施工情報 維持管理情報 カタログ情報 水の話 水処理新聞

※水にまつわる様々なレポートを発行しています。おのれはこちら
※フジクリーンの浄化槽やプロワの新製品のお知らせや動向をお知らせしています。お断りください

個人情報の取扱いについては、「個人情報保護方針」をご覧ください。
 個人情報保護方針に同意する

ダウンロードするには「注意・制限事項」をご覧ください。
 注意・制限事項に同意する

登録フォーム

もっと
motto!
広げよう

水環境をきれいに
する取り組み



(愛知県愛西市)
愛知県立
佐屋高等学校

地域の環境汚染と生物種絶滅の軽減へ。 アヒル農法で成果をあげる情熱プロジェクト。

(写真提供:佐屋高等学校)



学校内の水田(10a)で行われるアヒル農法では、毎年30羽の
ヒナが大活躍しています ※10a(アール)=1,000㎡



学校の文化祭や
地域イベントで販売、
もちろん完売



無農薬の米糠使用なので
化粧品メーカーも太鼓判!

毎年、愛知県内の環境技術や環境活動に貢献する企業や団体を表彰する愛知環境賞。2018年は同賞の中日新聞社賞に愛知県立佐屋高校が選ばれました。同校は、農業系と家庭科系の学科を有し、授業の一環として無農薬・無化学肥料の「アヒル農法」による米づくり、企業と連携した商品開発など多彩なプロジェクトに取り組み、今回の受賞につながりました。

アヒル農法とは、雑草や害虫を餌として食べるアヒルを水田に放すことで農薬や化学肥料を使用しない、環境にやさしい農法です。佐屋高校では「地域を守る環境意識を生徒たちに高めてもらおう」と亀嶋浩之先生(現・教頭)の指導のもと、2003年から水鳥を使った農法を実施しており、農薬や化学肥料を原因とする河川の水質汚染や生物種の絶滅を抑止する環境保全対策を進めてきました。約15年にわたって合鴨やアヒル、コールドックを使った農法を試し、おいしい米づくりだけでなく、水田の水質調査、コスト削減など、多くの課題に取り組み続けてきたのです。

さらに約3年前には次なる挑戦として農業の6次産業化をスタートさせました。6次産業とは、1次(生産)、2次(加工)、3次(流通・販売)まで多角的に事業を行うこと(1×2×3)です。佐屋高校では、つくった米を地元店舗との連携により、「アヒル農法米おにぎり」として商品化を果たしました。また、米を精米するときに出る米糠に着目し、化粧品メーカーの協力を得て商品開発を遂げたのが「SAYA保湿クリーム」です。両商品ともパッケージや容器、価格についても生徒たちが専門家と意見を交わしながら決定に至るという貴重な開発業務を体験しています。その他にもアヒル農法プロジェクトとして、地元小学生の総合学習で稲作体験を指導したり、地域農家へアヒルを貸し出してホタルの繁殖に役立てていただくなど、地域環境の保全に貢献しています。常に新しい視点で環境活動を推進していく佐屋高校は、来年度の課題テーマに着手中。内容はまだお伝えできないとのことですが、注目に値する活動内容に、ぜひご期待ください!



美しい水を守る

フジクリーン工業株式会社

本社 名古屋市中種区今池四丁目1番4号 〒464-8613 TEL(052)733-0325 <https://www.fujiclean.co.jp>

札幌支店 (011)738-5075	茨城営業所 (029)839-2271	岐阜営業所 (058)274-1011	佐賀営業所 (0952)31-9151
東北支店 (022)212-3339	宇都宮営業所 (028)625-4650	静岡営業所 (054)286-4145	熊本営業所 (096)388-3571
東京支店 (03)3288-4511	群馬営業所 (027)327-5611	四日市営業所 (059)350-0788	大分営業所 (097)558-5135
名古屋支店 (052)733-0250	埼玉営業所 (048)620-1424	和歌山営業所 (073)422-3634	宮崎営業所 (0985)32-3064
大阪支店 (06)6396-6166	千葉営業所 (043)206-5171	広島営業所 (082)843-3315	鹿児島営業所 (099)257-3501
福岡支店 (092)441-0222	新潟営業所 (025)271-8668	高松営業所 (087)869-8680	沖縄営業所 (098)862-9533
盛岡営業所 (019)604-2527	山梨営業所 (055)275-9300	松山営業所 (089)967-6123	
郡山営業所 (024)944-7780	松本営業所 (0263)27-2080	高知営業所 (088)803-1520	



発行 2019年1月1日
フジクリーン工業株式会社「水の話」編集室